



# 順正学園としての新たなスタート



順正学園 理事長・総長 加計美也子

高梁市の歴史とともに歩んできた私ども学校法人高梁学園は、本年4月より順正学園へと名称を変更し、新たなスタートを切りました。また、学園設立当初からある順正短期大学も吉備国際大学短期大学部へと名称変更いたしました。順正女学校の名をいただいた歴史的背景と、「順正」の名を広く後世に残したいという思いから、法人名にさせていただきます。

さて、去る4月4日には少し寒さも残る中ではありましたが、日中は春晴れの好天にも恵まれ、学園としては初めて吉備国際大学・吉備

国際大学短期大学部・順正高等看護専門学校との3校合同入学宣誓式を執り行うことができました。684人の新入生を迎え、県内外から保護者の方にも多数出席いただきました。また、近藤高梁市長をはじめ、多くの地元各関係機関ご来賓の方々にもご臨席賜り、ありがとうございました。

これからも高梁の地域とともに歩み、創立者が掲げた建学の理念のもと、本学園が理想とする教育研究に教職員一同さらに邁進して参る所存でございますので、今後一層のご指導ご鞭撻を賜りますよう、切にお願い申し上げます。



3校合同入学宣誓式 4月4日(日)

■問い合わせ 順正学園入試広報室 (☎@7178)

## 編集後記

公聴広報係が新体制になって、はや2カ月が経過しようとしています。なりわいビジョンから配属された職員2人を中心に、週3本の映像情報などを制作し放送している「行政チャンネル」。ケーブルテレビのアナログ29チャンネル・デジタル122チャンネルで放送しています。担当課の職員にも出演してもらい、市の行う事業や制度などを紹介する番組を制作していますが、慣れないせいもある、放送日に

追われながら悪戦苦闘の毎日を送っています。しかしながら、市民の皆さんの反応を聞いてみると、放送していること自体まだ知らない人が多いようです。公聴広報係のないうまくPRできていないという状況で、恥ずかしい限りです。さらにPRに努めるとともに、これを機会として、広報のあり方を今一度見つめ直したいと思っております。(TM)

# まちの伝言板 in 本丁神楽ロード



本丁商店会 会長 難波 彰浩 さん (51)

神楽オブジェや携帯ストラップ、神楽どら焼きなど、「備中神楽」を題材にして次々と地域おこしに取り組んでいる本丁商店会「本丁商人」(成羽町下原)。そんな彼らが次に取り組むのが、「キャンドルナイト in 本丁神楽ロード」と題した備中神楽の上演。神楽オブジェ14体が並ぶ商店街「神楽ロード」、そして

隣接する新町にもキャンドルを灯し、成羽文化センター1建設予定地の神楽会場にはたいまつを焚いて、炎の明りだけで備中神楽を上演しようというイベントです。

「キャンドル、たいまつ」の幻想的な雰囲気の中で、備中神楽を思う存分堪能ください」と難波会長は話します。

詳細は次のとおり。  
▽日時：6月26日(土) 午後5時～午後10時(予定)  
▽会場：成羽文化センター、神楽ロード周辺  
▽内容：備中神楽の上演

■問い合わせ 本丁商店会 会長 難波彰浩さん (☎@2356)



塩田瓦の民家も残る黒鳥の市場集落



奥ノ谷沿いの野呂から黒鳥への出口(谷口)

# 地名を歩く

六十六 備中町 黒鳥

今回の備中町「黒鳥」を理解していただくためには、まず一番この付近の地形を知っていただくことだと思います。備中町は平坦面が少なく、約70%が隆起準平原といわれる、標高400m(五〇〇)の起伏の緩やかな吉備高原上に生活の中心があります。したがって、深くV字谷に削り込まれた成羽川の渓谷地形の底の小さな河成段丘上の道路に沿ってできた黒鳥や長谷など街村状の地区が成羽川沿いに点在しているのです。高原上の野呂(地形)には平坦面のクボに水田が開け、起伏の緩やかな斜面は畑に利用されて、平地に乏しい渓谷の低地に位置する黒鳥などは対称的で高度差が二〇三〇m(有り)、交通は高原から流れ出る小さな谷に沿って道が発達し、上下の交通路は難所が多く急峻な坂道を人や牛馬で物資を運んでいました。高原の物資は谷沿いの道を下り、成羽川沿いの黒鳥や長谷の河岸場に集められ、市場が発達しました。中世から黒鳥や長谷は、布賀村の一部でした。江戸時代の「正保郷帳」(正保二〇三年頃一六四五～四六)では布賀村四八〇石余りの枝村となっていました。布賀は中世河上郡穴斗(門)郷(「布賀八幡宮棟札」)「県古文書集」と書かれ平川氏の勢力が強かった地域でした。その後毛利の支配から幕府領、そして元和三年(一六一七)松山藩領、同四年成羽藩領、その後再び松山藩領、寛永一八年(一六四一)幕府領となり、元禄六年(一六九三)松山

藩主水谷勝美の弟勝時が三〇〇石を与えられ、布賀に陣屋を構え、水谷氏領として、高原上の布賀が政治の中心となりました。弘化から嘉永年間(一八四四～五四)頃になって、成羽川の高瀬舟による河川交通がさかんになると、便宜を考へて、安政三年(一八五八)に布賀陣屋を下の黒鳥に移したため、河岸の「黒鳥」が発展し、市場町として栄えるようになりました。黒鳥の町には当時の面影はあがりませんが、塩田瓦を葺いた商家など残り、舟稼ぎで栄えた商家も見られ、町通りには川湊のあった川岸への小さな路地も残っています。黒鳥の町の昔を彷彿させてくれます。町の上(地域局への入り口付近)は「上の市場」といわれ、より下は「下の市場」といわれ、高原の牛や農産物が売買され、牛市が賑わい、高原の木炭、米、コンニャク、煙草が牛馬によって運び出され、問屋によって高瀬舟で下流の玉島や笠岡方面へ積出されていきました。下の市場にある原田秀生さん宅は昭和の初め迄紺屋をしていたといわれます。大正・昭和の頃迄賑わっていた町の様子を西家昭二さんは資料を交えて語ってくれました。「黒鳥」の家の多くは、布寄・長地や布賀などの野呂方から下りて商いをし、黒鳥に住みついた家が多かったとか、当時の家の屋号も残っているとか、明治の時代から高原の牛が集まり牛市が立ち、市の日には大変賑わって、店が繁盛していた。また、高原の煙草も集荷され仲買

だった」などと懐かしそうに話してくれました。現在の黒鳥の町の成羽川の大洪水の時、町の大半が被害にあった後、町が変わったといわれ、当時は成羽川が南の山すそ寄りに折れ曲がって流れていたから、現在の富家小学校付近は以前の川床だったのです。「黒鳥」は吉備高原上(野呂地域)の谷口集落として、また、市場集落として、河岸場として古くから成羽川の水運に依存して発展してきた町だったのです。今でも黒鳥陣屋のあった鶴見邸や平川氏一族のあった平川邸付近に野呂と河岸場を結ぶ奥ノ谷沿いの道の出口があつて、古くから牛馬に荷を背負わせて往き来した重要な道路の出口で、谷口集落としての「黒鳥」の歴史を語る場所として大切な場所として残っています。「黒鳥」の地名の由来はよくわかっていませんが「黒」は地名によく使われています。「くろ」は「ク」を表わし、崩壊・地形とか崖を意味し、崩れやすい石の多い地を表わすことが多いです。また「グロ」という意味にも用いられ、「物の集まるところ」などを言うこともあります。「クロ」は「クル」(転)で川の曲流点を示すこともあります。「トリ」(鳥・西・取)は切り取られたような地形の意味で、やはり崩壊・地形、浸食地を意味することが多いのです。「黒鳥」とは自然地名に由来するものかも知れません。(文・松前俊洋さん)

【お詫びと訂正】 先月号の26ページ「地名を歩く」に誤りがありました。お詫びして訂正します。(誤)作業門 → (正)作事門